

臘扇忌 (百回忌) 法要報告

六月四日(火)から六日(木)にかけて清沢満之先生百回忌法要と記念講演会が、本学講堂において厳修されました。日程と式次第は左記の通りです。

寺川俊昭大谷大学名誉教授

藤嶽明信助教

四日(火)

一、総礼

一、開会の辞

一、勤行

嘆仏偈

短念仏

回向「願以此功德」

一、実行委員長挨拶

一、記念講演

「大谷派なる宗門は、大谷派なる宗教的精神の存する所に在り―清沢満之先生の宗門改革―」

安富信哉教授

一、総礼

一、閉会の辞

一、恩徳讃

一、実行委員謝辞

五日(水)

一、総礼

一、開会の辞

一、勤行

嘆仏偈

短念仏

回向「願以此功德」

一、実行委員長挨拶

一、記念講演

安富信哉教授

「真宗教団の顕証」

廣瀬泉大谷大学名誉教授
加来雄之助教授

- 一、閉会の辞
- 一、総礼

- 一、実行委員謝辞

加来雄之助教授

- 一、恩徳讃

- 一、閉会の辞

- 一、総礼

六日（木）

- 一、総礼

- 一、開会の辞

- 一、勤行

伽陀「先請弥陀」

仏説無量寿経（読切り）

正信偈 草四句目下

同朋奉讃「弥陀成仏のこのかたは」次第六首

回向「願以此功德」

- 一、拝読文「絶対他力の大道」

- 一、感話

西本祐攝（博士課程二回生）

洪谷行成（博士課程三回生）

- 一、法話

実行委員長 安富信哉教授

- 一、恩徳讃

一、閉会の辞
三日間にわたり、各日も学内学外より約二五〇名の
参集がありました。一同改めて清沢満之先生を憶い、先
生の果たされたお仕事の歴史的意義を確認する機会を頂
くことが出来ました。以下、六日に行われました実行委
員長安富信哉教授による法話を掲載いたします。

法話

本年は、清沢先生の百回忌の年にあたります。先生が
生存したのは、幕末から明治の中期までの四十年でござ
いますけれども、先生はその短い人生を清く、厳しく、
廃仏毀釈などに陥って危機に直面した真宗の復興に尽力
し、献身し、比類なく深い、また透徹した思索を展開い
たしました。清沢先生は仏教者として、求道者として、
哲学者として、教育者として、教団改革者として、様々
な方面で業績を残した方でございます。しかも、その業
績のそれぞれが今もって精彩を失わず、私たちに問いか
けをもっておることでもあります。

清沢先生が夭折と言ってもいいかたちで、お亡くなり

になられてから、ほぼ一世紀の人類の歳月の間、すでに清沢満之全集が三回刊行されました。このことは先生の思想が、時代を超えて私たちに語りかけてくるからに他なりません。一時は時代の寵児になりながら、過去の追憶の彼方に葬り去られた明治の先覚者は多いのでありますけれども、そういう中で清沢先生の存在は異例であると言ってもいいかと思えます。ご承知のように、今年は大手出版社の岩波書店から、大谷大学版『清沢満之全集』全九巻の出版が計画されております。これは本学の諸先生や、今村仁司先生、久木幸男先生の編集によるものでありまして、本学の清沢センターにおきまして神戸和麿先生、加来雄之先生、一楽真先生が陣頭指揮をとられまして、急ピッチで編集作業が進められております。清沢先生が、日本の近代初頭に出現された意義につきましては、近年、大谷派宗門という枠をこえて、広く、哲学・思想の方面から大きな注目を受けております。それはとても喜ばしいことだと思います。したがって、この全集の出版を契機に、広い視野から、清沢先生の真価がこれからますますあきらかになっていくことと期待されます。

六月六日はご命日ということで、百回忌の今年は、こ

の日の前後に各地で様々な催しもたれております。去る五月二十五日には真宗大谷派教学研究所の主催で、高倉会館を会場として「今私たちにとって信とは」と題しまして、清沢先生をテーマとしてシンポジウムがもたれました。これには加藤智見・東京工芸大学教授が基調講演を行い、これを受けて福島和人先生、木越康先生、高柳正裕先生たちがパネリストとして発言をいたしました。

また、大谷派の学会におきましても、今年も清沢満之をテーマにして行われます。六月十五日には真宗尾張同学会の学会大会で、伊東慧明先生の記念講演がござります。七月十四日、日曜日の真宗大谷派教学大会は、「精神主義と現代」というテーマで、大村英昭・関西学院大学教授と児玉暁洋・元教学研究所所長のお二人の先生のご講演がござります。また、十月一日、火曜日には大谷大学真宗学会が催されますけれども、「日本における西洋哲学の受容と清沢満之」と題しまして、藤田正勝・京都大学教授のご講演が予定されております。私も発表いたします。その他の各地での法要・記念講演は、少なくともありません。とりわけ記憶に新しいのは、御自坊であります西方寺と、その所在地である碧南市で、去る六月一

日に今村仁司先生、池田勇諦先生、神戸和磨先生による記念講演がもたれ、また六月二日に百回忌法要と作家五木寛之氏の講演会が催されたことと、ご紹介します。五木氏は講演の中で「近代の日本は和魂洋才で出発したが、戦後私たちは無魂洋才の時代に入った」と。「そういう、今、近代日本の進路を危惧し、絶対他力の道を明らかにされた清沢先生の意義を再確認すべき時にきている」というお話をされました。二日間の催しには各地からたくさんの方々が参集されて、清沢先生の存在がいよいよクローズアップされているということを実感したことであります。

しかし、大谷大学にある私たちにとりましては、清沢先生は何よりも学祖として仰がれる方であります。清沢満之先生は一九〇一年（明治三十四年）、現在の大谷大学が、東京巢鴨に真宗大学の名で開学したおりに、初代学監として就任されまして、近代という時代に直面して本学の歩むべき道筋をあきらかにされました。

昨年二〇〇一年には、本学は近代化百周年を迎えまして、皆さま方のお力添えによりまして、その記念事業として、真宗総合学術センター響流館を落成することが出来ました。また、大谷大学百年史編纂委員会の尽力で

『大谷大学百年史』二巻を出版いたしました。そして今年には先生の百回忌をお迎えしたことでございます。この記念すべき年を迎えて、今年の臘扇忌をどのようにお迎えするのか、臘扇忌実行委員会の学生や、真宗学科の教員の中で話もたれたことであります。本学の臘扇忌は例年、有志の手によって勤修されておりますが、百回忌である今年は、特に臘扇忌実行委員会、真宗学会が中心となつて記念講演と臘扇忌法要を三日間連続して開催することになりました。全国の有縁の方々にご出席を呼びかけ、また、本学の教職員の方々にはご出席だけでなく、御懇志をお願いしたことでございます。おかげさまで、もちまして、本学の教職員の皆さまだけでなく、全国各地から同窓生、そして一般の方々のご参集を得まして、一昨日、六月四日には寺川俊昭先生より、昨日、六月五日には廣瀬杲先生より、大変に貴重な記念講演をいただき、そして今日は百回忌法要を無事勤修することが出来ました。

従来、京都にあつた真宗大学の東京移転に伴いまして、清沢先生が学監の職に就いたのは一八九九年（明治三十二年）、三十七歳のときでございました。重い肺結核をおしでの決断でありましたけれども、そこに真宗大学へ

の並々ならぬ抱負がうかがわれることであります。清沢先生は、新都・東京に近代的な大学を建てるということにより、世界人類に仏教を捧げようと希求いたしました。こういうことを述べておられます。

先生嘗て真宗大学を論じて曰く。この大学は世界第一の仏教大学たらしめざる可からず。他日欧米より、仏教を学ばんがために日本に留学するものあらば、必ず先づ真宗大学に来るべし。

(全集八・四九〇―一)

いかにもロマンの薫り高い、気宇広大な大学の構想であります。清沢先生は二十世紀初頭に、アジア・アメリカ・ヨーロッパに開かれた国際的なスケールを持った仏教研究センターを建てることを願ったわけであります。その志願は、宗乗・真宗学、余乗・仏教学、そして哲学というカリキュラム編成にもうかがうことが出来ます。と同時に文明開化と富国強兵のかけ声の中で、近代の病弊を兆しつつある東京で、人間の本来性回復のために仏教をあきらかにしたいと、期待しておりました。例えばこういうように言っておられます。

清沢先生は常に真宗大学が東京に来らば、東京の如き、物質主義、積極主義に反して、精神主義、消極

主義の一大活泉を得たしと談じ居られ候。

(全集八・三四八)

先生は世の流れに抗して、日本の中心地・東京に精神主義・消極主義を旗印とするアカデミーの府を置くことに大きな自負心を抱いておられました。ここには対抗文化、カウンターカルチャーとしての学問の府の創設が構想されていたことがうかがわれることであります。

そして、一九〇一年(明治三十四年)十月十三日、各界の来賓を迎えて、東京巢鴨の地に真宗大学は開校したことであります。開学の式典で先生は次のように述べておられます。

本学は他の学校とは異なりまして宗教学校なること、殊に仏教の中に於いて浄土真宗の学場であります。即ち、我々が信奉する本願他力の宗義に基づきまして、我々に於いて最大事件なる自己の信念の確立の上に、其の信仰を他に伝へる、即ち自信教人信の誠を尽すべき人物を養成するのが、本学の特質であります。

(全集八・三五四―五)

このように「開校の辞」で先生は述べておられることでもあります。ここにあきらかに説かれておりますように、真宗大学は他の学校とは異なる浄土真宗の学場であると、

明確に位置づけておられます。先生がおっしゃる「他の学校」とは何を指すのか。官学としての東京帝国大学をまず挙げるかと思いますが、また、先生が身近に視野に入れておられたのは、東京の他の私学であったのかと思われます。すでに早く開学した慶應義塾大学をはじめ、明治十年代に続々と誕生した私学。例えば、五大法律学校と言われる私立学校があります。専修学校、現在の専修大学。東京法学校、現在の法政大学。明治法律学校、現在の明治大学。東京専門学校、現在の早稲田大学。英吉利法律学校、現在の中央大学、などではありません。それらは法律家の要請という実目的を持って創学されたのであります。

清沢先生は帝国大学を補完する役割を担った、それらの実学中心の私学とは異なる、精神の府として真宗大学を位置づけたのであります。「開校の辞」は、真宗大学が親鸞聖人のお心を受けて、自立的な宗教的人格を養成する場になって欲しいと願う、先生の期待を表明する教育宣言でありました。「開校の辞」に表明される清沢先生の願いは、大谷大学の歴史の中で必ずしも順調に継承されてきたわけではありませんでした。しかし、先輩たちによって清沢精神の名のもとに語り伝えられてまい

りました。私たちは本学に入学して以来、様々な先生方より、この清沢先生の精神についてお聞きしたことであります。曾我量深先生、金子大栄先生、安田理深先生、松原祐善先生。とりわけ清沢精神というものをあきらかにしてくださった人として、これらの方々がおられることであります。そして今年、清沢先生の百回忌をお迎えして、この講堂を会場にして、法要と記念講演を催し、改めて先生の遺徳を偲び、先生の志願に触れる機会を持つことが出来たこととございます。こういう機会に遇わせていただいたということは、清沢先生を讃仰するものにとっては忘れられない思い出となったこととあります。

一昨日は寺川俊昭先生より、「大谷派なる宗門は、大谷派なる宗教的精神の存する所に在り」というご講演をいただいたこととあります。寺川先生は、清沢先生が宗門改革運動の中で、まさに身を挺してこの運動を推進していった姿を百年前のこととありながら、今、生きている私たちに本当に近い事柄として生き生きとお話くださいました。そして清沢先生がいかに深く大谷派なる宗門を念じておられたか、そしてその祈り。先生の言葉で言えば、大谷派なる宗教的精神が現在の大谷派なる教団、そして大谷大学の原点になっているのである、というこ

とを確認してくださいました。

また昨日は廣瀬泉先生より、「真宗教団の顕証」と題するご講演をいただきました。廣瀬先生は清沢先生が、『教界時言』において、宗門について語るとき、真宗大谷派という宗名を表す言葉を用いず、ただ大谷派と言っていることに注目なさいました。そしてやがて清沢先生が学監に就任するにあたり、あえて真宗大学という大学名を名のつたということに触れまして、真宗大学の名のりは、この大学が真宗を明らかにする学場であることを願われた清沢先生の志願をあらわすものであると喝破なさいました。そして私たちはその真宗に問われているのである、といってお話を結ばれたことであります。

お二人の力強いご講演を感銘深くお聞きして、両先生の清沢先生への深い想いを改めて受けとめさせて頂きました。ご健在を本当に嬉しく思いますと共に、今私たちがどういう伝統の中にいるのか、どういう場で学んでいるのか、何のために研究しているのか、ということは今更ながら考えさせられたことであります。両先生には清沢精神の本髄に触れるお話を賜ったことを、本当にありがたく存ずる次第であります。

さて、以上のように、本日三日間にわたる清沢満之先

生百回忌の記念講演会、並びに法要を多くの方々をお迎えして円成することが出来ました。皆さま方の中には次の百五十回忌をお迎えすることの出来る方もおられるかも知れませんが、清沢精神というものは本学の中でこれからも脈々と伝えられていくでありましょう。また、伝えられていかなくても構いません。ともあれ、本日をもって三日間の日程を無事終了することが出来ました。大会の運営、法要の運営にこれまで協力いただきました、教職員、学生の方々にお礼を申し上げます。また、会場の皆さま方にはお忙しい中、本日の清沢満之先生の百回忌・臘扇忌法要にご参集たまわったことに、臘扇忌実行委員会・真宗学会を代表いたしました感謝申し上げます。ありがとうございます。